スズロとソゾロ（その一）

我妻　多賀子

一　はじめに

平安時代に出来た歌物語の一つ『伊勢物語』は、成立以来非常に愛読され、おびただしく流布した作品として知られている。したがって、その本文も諸形態が伝わっているが、今は和歌二〇九首を持ち、一二五段から成る藤原定家書写本を底本とする場合が多い。（注1）

その『伊勢物語』の一四段の書き出しは左のようになっている。

。むかし、をとこ、みちの国にすずろに行きいたりにけり。　＜一四＞

右の文中のスズロニは、形容動詞スズロナリの連用形が副詞化した語で、用法的には「行きいたりにけり」にかかっている。意味的には、心の赴くままにはっきりした目的や理由もなく行動する様子を述べていて、「あてもなくふらふらと」「漫然と」などと訳すことが出来る。よって、一文は「昔、男が陸奥国にあてもなくふらふらと行き着いた」と

なる。ところで、同じ個所が、『伊勢物語』の阿波国文庫本では、左のようになっている。（注2）

。むかし、をとこ、みちの国にそぞろにいたりにけり。　　＜一四＞

この二文を比べてみると、微妙な違いはいくつかあるが、最も大きく変わっているのは、一目瞭然、スズロニがソゾロニになっている点にある。その他、中古および中世以降の作品をひもといてみても、スズロが出て来ることもあれば、ソゾロと書かれた例に行き当たることもある。

そして、このスズロ・ソゾロの違いはつまり同じサ行のウ段音とオ段音の違いということになるが、こういうウ段、オ段の交替は左に記すように、他にも例がないわけではない。思いつくままに、いくつか挙げてみると、たとえば

イヅク〜イヅコ（何処・どこ）、ウコ〜ヲコ（烏滸・馬鹿げたことをすること）、カルシ〜カロシ（軽い）

タクブラ〜タコムラ（手腓・手の筋肉のふくらんだ所）（注3）、タヅキ〜タドキ（方便）

マユ〜マヨ（眉）、マルシ〜マロシ（丸い）、ワルシ〜ワロシ（悪い）　などがある。

ところで、これらウ段音とオ段音の語に関して見た場合、そのうちのどちらが先に生まれ、どちらが後から出て来たかは、個々の語によって相違があり、一概に同じではない。

それでは、スズロ・ソゾロについては、どちらが先に使われるようになったのであろうか？また、意味・用法から見ると、スズロとソゾロには何らかの相違が存していたのであろうか？

これらの疑問を解明すべく、今号以後、この二語に関して比較検討をしてみることにしたい。以下、初めにスズロ、続いてソゾロのそれぞれについて調査結果のあらましを記し、最後にまとめて比べてみることにする。

二　スズロ

スズロは上代にはその例がなく、平安時代に入ってから見られるようになった語である。以下、便宜的に、初めに中古、続いて中世以降について、その意味・用法を述べて行くことにする。

☆ 中古

まず「一　はじめに」のところで触れた『伊勢物語』では、一四段の例の他に、あと三例スズロが使われているが、うち一例は、左に記すように、先の例とよく似ている。

。むかし、男、すずろに陸奥の国までまどひいにけり。　〈一一六〉

右の例は一四段の場合と酷似していて、スズロニを「あてもなくふらふらと」と訳すことで何の問題もない。

続いて、『伊勢物語』に見えるあとの二例は次のようなものである。

。わが入らむとする道は、いと暗う細きに、つたかへでは茂り、物心ぼそく、すずろなるめを見ることと思ふに・・・　〈九〉

。この石、ききしよりは見るはまされり。これをただに奉らばすずろなるべしとて、人々に歌よませ給ふ。　〈七八〉

右のうち、初めの例は、旅人が自分のこれから入って行こうとする道について述べた文章で、そこがとても暗くて細

い上に、蔦や楓が茂って、何となく心細くスズロな目に合うことだと言っている。そこで、ここのスズロはこれまでのような「あてもなくふらふらと」という解釈に当てはまらない。この場合のスズロは、自分の予期したことに反した事態が出現したときの思いがけぬいやな感じを表しているので、「不本意である」「とんでもなくひどい」と訳すことが出来る。二番目の七八段の例は、献上する石が前から聞いていたのよりも実際に見ると一層すばらしいものだったため、ただそれだけを差し上げるのはスズロであろうと言うことから、人々に歌をお詠ませになったという内容の文章で、スズロは「不本意である」よりも、むしろ「風情がない」「おもしろくない」と訳した方が適当である。

以上、『伊勢物語』に出て来る四例のスズロは意味的に三つに分けて考えることが出来る。これを仮に、A～Cとしてまとめてみると、左のようになる。（注4）

A・・・・（目的や理由がなく、心の赴くままに行動する様子を言い）　あてもなくふらふらと、漫然と

B・・・・（予期に反していやな事態が生じたときの不満な様子を言い）　不本意である、とんでもなくひどい

C・・・・（しっくりしないで、面白味に欠ける様子について言い）　風情がない、つまらない

引き続いて、他の中古の作品では、スズロがどのように用いられているのかを、右に記したA～Cの意味にのっとって見て行くことにしたい。以下、中古の代表作である『枕草子』と『源氏物語』について初めに作品別考察をし、その他のものは、後でまとめて述べることにする。

まず、『源氏物語』よりもいくらか成立時期が早い『枕草子』から見ると、スズロは計一四例使われている。このうち、『伊勢物語』に出て来たA～Cと同じ意味のものは一例も用いられていない。『枕草子』に最も多く出て来るスズロは、左のようなものである。

・木々の木の葉、まだいとしげうはあらで、わかやかにあをみわたりたるに、霞も霧もへだてぬ空のけしきの、なに

となくすずろにをかしきに・・・　　〈五〉

右は、四月の葵祭が行われる頃の自然界の有様を記したところで、木の葉がまだ非常に茂っているという程でなく、みずみずしく青みわたっている時分に、（春の）霞も、（秋の）霧も、眼をさえぎらない（初夏の）空の様子が、何となくスズロニ趣（おもむき）があると言っている。ここには、清少納言が盛んに用いたヲカシの世界がくり広げられていて、スズロニは、まさにその形容詞ヲカシを修飾している。したがって、ここのスズロには、A「あてもなくふらふらと」、B「不本意である」、C「風情がない」のどの訳も当てはまらない。この場合のスズロは直訳すると、「わけもなく」などの訳語が当てはまるであろうか？　つまり、ここのスズロは、これと言った特別な理由がなく、ある方向へ自然に進んで行く状態、気待ちを表していると考えられる。他に『枕草子』には、この種のスズロが左に記すように、五例見える。

。木立などのはるかにものふり、屋のさまも高う、けどほけれどすずろにをかしうおぼゆ。　　〈七八〉

。内裏は、五節の頃こそ、すずろにただなべて、見ゆる人もをかしうおぼゆれ。　　〈九二〉

。「御産たひらかに」などげんげんしげに申したるなど、すずろにいかならんなど、おぼつかなく念ぜらるかし。　　〈一二〇〉

。七日にまゐり給へりしかば、いとうれしくて、その夜のことなどいひ出でば、心もぞ得給ふ、ただ、すずろにふといひたらば、あやしなどやうちかたぶき給ふ。　　〈一六一〉

。そうけ野こそすずろにをかしけれ。　　〈一六九〉

これらのうち、三例は、連用形スズロニがヲカシ（もしくはヲカシウオボユ）にかかっている。このかかり方は最初に挙げた五段の例と同じである。しかも、七八段と一六九段は、自然界の様子について述べている点でも五段と酷似している。これら三例はそれぞれ「建物の様子も高く、人離れはしているが、何となしに趣深く感じられる」「そうけ野こそわけもなくおもしろい」と部分的に解釈することが出来、スズロは「何となく」「わけもなく」の意味になる。

また、九二段は宮中でいつも顔を合わせている人の五節の頃の様子をヲカシク感じると言っているところで、ヲカシは、人を対象としているため、「趣深い」「おもしろい」よりも、「きれいだ」とか「素敵だ」と訳した方がぴったりする。そして、いつもの人が、なぜ、五節の頃にヲカシク思われるのかは、とりわけ原因や理由のあることではないので、そのヲカシにかかるスズロニは、やはり「何となく」「わけもなく」の意味がふさわしい。一文は「宮中は、五節の頃こそ何となくただもう、いつも顔を合わせている人まで、きれいに感じられる」と通釈出来る。

残る二例について、とりあえず、スズロニの使われたところを解釈してみると、「いかにも効験あらたかそうに申したのなど、ただわけもなく『お産はどうだろうか』と気がかりで、自然祈りたくなるものだ」「あの夜の話など言い出したら、おわかりになるだろう。ただ、何となくいきなり言ったら『妙なことだ』と頭をかしげられるだろう」となる。これらは、スズロニが形容詞ヲカシではなく、それぞれ、念ズ・言フという動詞を修飾している。そして、一二〇段の念ズには、自発の助動詞ラルが付き、念ゼラルとなっているので、特に理由もなく自然に祈念することになる。よって、スズロニは「わけもなく」の意にとれる。一六一段の方も、意識的にではなく、自然の勢いで急に言ったらどうかという事を話題にしているので、スズロニは「何となく」で訳すのが最もふさわしいように思われる。

ところで、以上考察を加えて来た『枕草子』のスズロ六例は、「はっきりした目的や理由もなく、自然の赴くままに進んでいく」という点では、最初に見て来た『伊勢物語』の一四段、一一六段の例とよく似ている。ただ、『枕草子』の場合には、スズロは多くヲカシという形容詞にかかっていた。また、動詞の場合にも、念ズ・言フという、どちらかというと、あまり激しい動きを伴わない静的なものにかかっていた。それに対して、『伊勢物語』の例では、スズロは行キイタル・マドヒイヌなど行動の顕著な動詞にかかっている。そこで、同じように、これと言った理由・目的もなく自然の勢いに任せて進む様（さま）について言っているとはいえ、『伊勢物語』のスズロは「あてもなくふらふらと」、一方、『枕草子』の方は「わけもなく」の意味になる。

つまり、かかって行く語の違いによって、スズロには微妙な意味の使い分けが見られることとなる。いずれにしても、ここで、『伊勢物語』には出て来なかった「何となく」「わけもなく」という新しい意味を加えることにしたい。

続いて、残る『枕草子』のスズロ八例のうち、次に用例数の多かったものは、左のような例である。

。頭の中将の、すずろなるそら言を聞きて、いみじういひおとし・・・　〈八二〉

右の文は「頭の中将（藤原斉信）が、（私ニ関スル）いい加減な噂を聞いて、ひどく私のことをけなし・・・」と訳すことが出来る。ここでは、スズロが連体形として使われ、「そら言」にかかっている。「そら言」は「ありもしない作りごと」の意で、それを形容する言葉といえば、「わけもない」よりも、もっと意図的な「いい加減な」「でたらめな」「他愛もない」などの意になろう。この種のものは、『枕草子』にあと四例見える。

。一夜はせめたてられて、すずろなる所々になん率てありき奉りし。　〈八四〉

。さて、などともかくも御返りはなくて、すずろなる布の端をばつつみて賜へりしぞ。　〈八四〉

。衣などにすずろなる名どもをつけけん、いとあやし。　〈一三四〉

。宮の辺に案内しにまゐらまほしけれど、さもあらずは、うたてあべしと思へど、なほ誰か、すずろにかかるわざはせん、仰せごとなめりと、いみじうをかし。　〈二七七〉

右のうち、初めの三例は、スズロの入っている部分をそれぞれ「いい加減な所々」「他愛ない若布の切れ端」「でたらめな名」と訳せ、先に記した八二段の例と同じく、スズロはすべて連体形として使われ、すぐ下に来る体言にかかっている。よって、意味・用法共にどれもよく似ている。最後の二七七段の例は、到来物として届いた畳について、誰が

贈り主なのか、作者が思案するところで、一文は「『中宮様の辺りに事情を伺いにあがらせたいけれど、もし、中宮様からでなかったら、ばつが悪いだろう』と思うが、『誰がいい加減にこんなことをするだろう。やはり中宮様のお指図なのだろう』と、とても興味深い」となる。スズロは連用形として使われ、文法的には「わざはせん」の「せん」にかかっている。ただ、意味的にはむしろ、「かかるわざ」にかかっているととる方がしっくりする。すなわち、中宮様以外の誰がこんないい加減なことをするのだろうという、半ばあきれ、半ば喜んでいる作者の気持ちが込められていて、スズロは「いい加減」とも、「ものずき」とも「冗談半分」とも訳すことが出来るように思う。以上、これら五例のスズロも、今までには見られなかった新しい意味として加えることにしたい。

さて、『枕草子』には、他にスズロが三例出て来る。これらは、今まで述べて来たものと、またいくらか意味が違っているので、例を挙げて左に述べていくことにする。

。「いみじうめでさせ給ひける」など、おほせらるるにも、すずろに汗あゆる心地ぞする。　＜一三＞

。人よりはすこしにくしと思ふ人の、おしはかりごとうちし、すずろなるものうらみし、われさかしがる。　＜一二一＞

。人の妻のすずろなる物怨じしてかくれたるを、かならずたづねさわがんものぞと思ひたるに・・・　＜一二五＞

初めの例は「円融院の時代に三位の中将が歌をほめられたという話」を定子中宮から聞いた清少納言が、自らの即妙の才をためされたのと思い合わせ、「冷や汗の流れるような思いをした」という場面で、そこにスズロがかかっている。この場合、冷や汗の流れ方は普通ではなく、あるべき程度を越えていたと思われるので、ここのスズロは「むやみに」とか「やたらに」と訳せるように思う。続く一二一段は「いみじう心づきなきもの」、すなわち「ひどく気にくわないもの」について述べた段で、ここは「『他の人より少々心にくい』と思う人が、当て推量で物を言い、スズロな恨み言を言ったり、自分こそはとえらぶったりする」ことを、気にくわないものの一つとして挙げている。その次の一二五段

は「むとくなるもの」、つまり「何にもならないもの」を並べた段で、一文は「人妻がスズロな嫉妬をして身を隠したとき、夫が必ず探しまわるだろうと思ったのに」と訳すことが出来る。これらの場合、スズロは「わけもなく」とか「何となく」と訳せなくもないが、それよりもむしろ、「むやみに」もしくは「やたらに」と解釈した方がいいと思う。なぜならば、スズロはそれぞれ「ものうらみし」「物怨じし」という語にかかっているが、これらは、ただの「うらむ」や「怨ず」ではない。要するに二例とも、接頭語「もの」が付いた形で使われ、その接頭語自体にすでに「わけもなく」「何となく」の意が含まれていることになる。したがって、この場合、スズロは「ものうらみす」や「物怨じす」を、より強めた言い方ととり、「むやみに」とか「やたらに」と解釈した方が妥当であると思われる。

以上、『枕草子』のスズロ一四例について考察を加えてきた。その結果、『伊勢物語』には出て来なかった、新しい三つの意味の存在が考えられたので、これらをまとめてみると、左のようになる。

D・・・・（理由なく、自然に進んで行く状態、気持ちを言い）　何となく、わけもなく

E・・・・（出任せで、筋が通らない様子を言い）　いい加減な、でたらめな、他愛もない

F・・・・（あるべき程度を越えているさまを言い）　むやみに、やたらに

続いて、『源氏物語』のスズロについて、まずこれまで記したA～Fの意味の順に、例を挙げて説明していくことにする。なお、これら六つの意味群に当てはまらないものが出て来た場合には、後で付け加えることにしたい。

『源氏物語』には計五〇例のスズロが使われている。そのうち、まずAのスズロは左のように三例出て来る。

。日も暮れにけれど、すずろに旅寝せんも、人の咎むることやとあいなければ、帰り給ひぬ。　＜早蕨＞

。誰によりて、かくすずろにまどひ歩くものにもあらなくにと思ひつづけたまひて・・・　＜東屋＞

。［母君ハ］例の家にもえ行かず、すずろなる旅居のみして、思ひ慰むをりもなきに・・・　＜蜻蛉＞

右のうち、「東屋」の例は、大君の死後、浮舟を連れて宇治に到着した薫の独白の部分で、「自分がこうしてあてもなくあちこちさまよっているのは、誰のためでもないのに（大君ヘノ切実ナ思イユエナノダ）」と訳すことが出来る。そして、スズロニは、マドヒアリクという、はっきりした行動を示す動詞を修飾している。あとの二例も「旅寝」「旅居」という、どちらかというと行動的な言葉にかかっている。よって、右の三例は、これといったあてもなく、心の赴くままに行動するときに、「あてもなくふらふらと」の意味で用いるAのスズロととることが出来る。

次に、Bに属するスズロは、左の一例のみである。

。ものおぼえぬ心にまかせつつ、山林に入りまじり、すずろなる田舎人になりなど、あはれにまどひ散るこそ多くはべりけれ。　＜宿木＞

右は、光源氏が亡くなった後の様子について、薫が話す部分で、主語は「はかなき女房」、つまり「頼りどころもない身分の低い女房」を指している。一文は、そういう女房たちが「前後の区別もつかなくなっては、山林に入りこんだり、思いもかけぬ田舎者になったりなど、哀れにあてもなく散らばっていたのが多うございました」となり、スズロは、まさかそうなるはずだとは思っていなかったのに、予期に反して、田舎者になってしまったという女房たちの不満を述べているので、スズロはBの「不本意である」「とんでもなくひどい」の意にとれる。

続いて、Cの意味にとれるスズロは左の二例になる。

。心憂き身にはすずろなることもいと苦しく・・・　＜浮舟＞

。かかる御住まひは、すずろなることも、あはれ知るこそ世の常のことなれ。　＜手習＞

初めの例は、中の君が、葉のことを話題にした匂宮に懸命に抗弁する場面で、一文は「私のように情けない身の上では、そういうつまらない冗談ごともほんとうにつろうございます」となる。次の例は、妹尼が浮舟に向かって「このような所にお暮らしでいらっしゃるのでしたら、つまらないことでも、人の情けを分かるのが世の常というものです」と、なだめすかすように言うところである。いずれも、スズロは、根も葉もなく面白味に欠ける様子について言い、Cの「風情がない」「つまらない」にとれるばかりでなく、二例とも連体形で、体言「こと」にかかっているなど、用法的にもよく似ている。

続いてDの「何となく」「わけもなく」の意にとれるスズロは計一八例見え、用例数から言うと、『源氏物語』の中では最も多い。例を少し挙げてみよう。

。気色ある言葉は時々まぜたまへど、見知らぬさまなれば、すずろにうち嘆かれて渡りたまふ。　〈胡蝶〉

。いとかりそめに世を思ひたまへる気色、似るものなく心苦しくすずろにもの悲し。　〈御法〉

。いとあてに限りもなく聞こえて、心ばへある古言などうち誦じたまひて過ぎたまふほど、すずろにわづらはしくおぼゆ。　〈東屋〉

初めの「胡蝶」の例は、光源氏が玉鬘について感じたことを述べた個所で、一文は「わけのありそうな言葉はときどき混ぜては話をなさるけれど、（玉鬘ガ）気づかない様子をしているので、（源氏ハ）なんとなく嘆かわしくお思いになってお帰りになる」と訳すことが出来る。次の「御法」の例は、「（紫ノ上ガ）この世を一時的なところと思っていらっしゃるご様子が何ものにも例えられない程痛々しく、わけもなくもの悲しく感じられる」という解釈になる。最後の「東屋」は「（匂宮ガ）まことに上品にこの上なくよいお声で趣のある古歌などを口ずさんでお過ぎになる」のを、中の君が「なんとなくめんどうで気にかかる」と感じている部分である。

右の三例の場合、いずれもスズロは連用形として、下の用言にかかっているが、その用言は「うち嘆かる」「もの悲

し」「わづらはしくおぼゆ」など、ほとんど動作・作用を伴わない心情表現のものばかりである。したがって、スズロは目的や理由がなく、気の向くままに進んでいくさまを述べてはいても、そこには顕著な動きが認められないので、Aではなく、Dの意味になる。なお、『源氏物語』のDに属する他のスズロの例を見ると、まず、すべてが連用形スズロニの形で、副詞的に他の用言にかかって用いられていることが、特徴の一つとして挙げられる。そして、そのかかって行く用言を調べてみると、形容詞の「すさまじ」「恋し」「かなし」「あさまし」「心ぼそし」「苦し」「恥づかし」そして、形容動詞の「なみだがちなり」「ものあはれなり」「たのみがほなり」など、心情表現のものが圧倒的に多い。しかも、その心情は、人間の寂しさ、悲しさなど、どちらかというと、マイナスイメージにとれるものが大部分である。ただ、かかって行く用言が動詞の場合には、「起きあかす」や「ゐ暮らす」、そして「笑みて聞き居たり」とか「心地あくがれにけり」などとなり、必ずしも悲しく寂しい感じにとれるものばかりではない。よって、一概には言えないが、少なくとも形容詞・形容動詞へのかかり方から判断すると、スズロが「わけもなく」「なんとなく」というDの意で用いられるときには、おおむね、明るく晴れやかな語と共に使われることは、ほとんどなかったのではないかと思われる。次に、Eのスズロを見ることにしよう。これは出任せで分別がないことを言い、「いい加減な」「でたらめな」の意味を表すものであるが、『源氏物語』には、一四例と、Dに次いで多く使われている。まず、ここでも少し例を挙げて説明していくことにしたい。

。かう心うくなおはせそ。すずろなる人は、かうはありなむや。　〈若紫〉

。ほどさへあはれなる空のけしきに、なぞや心づから今も昔もすずろなることにて、身をはふらかすらむと、さまざまに思し乱れたるを・・・　〈明石〉

。人少なにいとあやしき御歩きなれば、すずろならむ物の走り出で来たらむもいかさまにと、さぶらふかぎり心をそまどはしける。　〈浮舟〉

一番初めの「若紫」の例は、紫の上を二条院に迎えた源氏が発した言葉で、解釈すると「こんなつくづく情けなくいやになるような目にあわせないでください。いい加減な気持ちの人がこんなに尽くすものですか」となる。紫の上に一生懸命尽くしていると自負する源氏が、ただの出任せでこんなに出来るわけがないと開き直っているところで、スズロは連体形スズロナルの形をとり、下に来る体言「人」にかかっている。次の「明石」の例は、源氏に赦免の宣旨が下り、いよいよ明石の君と別れて帰京することが決まった時の文で、「なぞや」から「はふらかすらむ」までが、源氏の心内語になっている。書き出しの「ほど」は仲秋の季節を指し、副助詞「さへ」には、明石一家の哀れに加えて時候までもという添加の意が込められている。したがって、一文は「時節までがしみじみとした感じのする空の様子であるにつけても、『どうして自らの心によって、今も昔も無分別な恋路に憂き身をやつすのだろう』とあれこれ思い悩んでいらっしゃるのを」と訳すことが出来る。先の例と同じく、ここでもスズロは連体形として、下の「こと」を修飾している。最後の「浮舟」の例は、浮舟に逢うために、供人もあまり連れず、身なりをやつして忍び歩きをしている匂宮のことを、お付きの者たちが「でたらめな何者かがとび出してきたらどうなるのだろうか」と心配するところで、スズロは「若紫」や「明石」の例と違い、未然形で使われている。ただ、この未然形はすぐ下に仮定・婉曲の意を示す助動詞のムが来て、その下の体言「物」にかかっている。要するに、ここは「スズロナル物」としてもいいところだが、はっきりそうかどうかわからないので、「スズロナラム物」と、遠まわしな言い方をしていることになる。なお、実際には「スズロナラム物」つまり「わけのわからないような物」は、分別のない追い剥ぎのようなものを指しているらしい。つまり、この最後の例も、直接ではないが、スズロナルは下に来る体言を修飾していると考えられる。

ところで、『源氏物語』に見えるEスズロの他の例を見ると、すべて連体形として使われ、すぐ下の体言にかかっている。そして、その体言は「やう」「わざ」などの形式名詞をはじめ、「心地」「車」「継子かしづき―継子ヲ大事ニ育テルコトー」「眷属の人―家来衆―」「なげき―タメ息―」など、きわめて多種多様である。よって、人でも物でもあるいは抽象的事項でも、それが分別に欠け、いい加減ででたらめなものであれば、スズロを冠して使っていたことがわかる。

続いて、Fのスズロについて述べることにする。これは程度がはなはだしいことを言い、「むやみに」「やたらに」と訳せるものであるが、『源氏物語』には合計八例出て来る。ここでもやはり、三つほど例を挙げて説明してみよう。

。よろづに仕うまつり営むを、いとほしうすずろなりと思せど・・・　　〈明石〉

。まして若やかなる上達部などは、思ふ心などものしたまひて、すずろに心げさうしたまひつつ、常の年よりもことなり。　　〈初音〉

。若き人はいとほのかに見たてまつりて、めできこえて、すずろに恋ひたてまつるに、世の中のつつましさもおぼえず。　　〈東屋〉

初めの「明石」の例は、明石の入道からいろいろと世話を受けた源氏が「いとほしうすずろなり―気ノ毒デヤリ過ギデアル（コンナニマデシテクレナクテモイイノニ・・・）―」とお思いになるところである。明石の入道の世話の仕方が、常軌を逸しているところから、スズロは程度のはなはだしさを述べる語ととれる。なお、この例では、スズロが終止形として使われているが、実は『源氏物語』の中で、終止形スズロが出て来るのはここだけである。次の「初音」の巻は、玉鬘に関心を寄せる若い上達部が主語となり、スズロは下の「心げさうす」という語にかかっている。「心げさう（化粧）す」は「自然と気持ちが緊張し改まった気分になる」の意を示すサ変動詞である。よって、一文は「まして年の若い上達部などは、思いを秘めた気持ちもおありであるから、やたらに緊張し改まった気分になっていらっしゃるので、例年とは格別なものがある」と訳すことが出来る。玉鬘を意識した年若の上達部の胸のときめきは、かなり程度が激しかったものと思われる。三番目の「東屋」の例では、今度は若い女房が主語になっている。スズロは「恋ひたてまつる」という語にかかっているが、その相手は薫を指し、一文は「若い女房は薫の姿をほんのちょっと拝見しただけで感嘆し、むやみにお慕い申し上げるので、世間への気がねなど考えられもしない」となる。したがって、ここでは、薫への慕い方が並大抵のものではないことを言い、スズロはやはり「無性に」とか「やたらに」とか、程度のはなはだしい意で使われている。

以上掲げた三例を除くFのスズロは、すべて連用形スズロニの形で用いられ、下に来る語を修飾している。そして、そのかかって行く語は、「高し」「恋し」という形容詞の他に、「語り愁ふ―コボシ訴エル」「涙もろにある―涙モロイモノナノダ」「あだへ隠す―悪フザケヲシテ隠ス」など、さまざまである。つまり、用法的には言い切りの形で用いられたり、自由に他の語にかかったりし、意味的には程度のはなはだしさを表しているものが、Fのスズロということになる。

ところで、以上A～Fまで用例に当たりながら見て来たスズロは、すでに『伊勢物語』や『枕草子』で考察を済ませたものばかりである。この他に『源氏物語』には、右の六つの意味群には含まれない新しいものが二種出て来る。一つ目は左のようなもので、全部で三例見える。

。すこしねぶたげなる読経の、絶え絶えすごく聞こゆるなど、すずろなる人も、所がらものあはれなり。＜若紫＞

。近くさぶらふ女房二人ばかりあれど、すずろなる男のうち入り来たるならばこそは、こはいかなることぞとも参り寄らめ、うとからず聞こえかはしたまふ御仲らひなめれば・・・　＜宿木＞

。すずろなる人をしるべにて、その心寄せを思ひ知り始めなどしたる過ちばかりに思え劣る身にこそ・・＜浮舟＞

初めの「若紫」の例は、紫の上に会った源氏が尼君に意中を訴える前の文で、「少し眠たそうな読経の声がとぎれとぎれに、ぞっとするほど身に沁みて聞こえるのなど、スズロナル人も場所が場所なので、わけもなくしみじみとした気分になる」と通釈出来る。そこで、ここのスズロナル人は「物のあわれを解しないような人」、つまり「無関心な人」の意で用いられている。そして、そんな人でさえ、しみじみとした思いになるこの場の雰囲気であるから、ましてや物のあわれを人一倍感じる源氏は、あれこれ思案がつきないという文が、この後に続いている。二番目の「宿木」の例は中の君に言い寄る薫のことを述べたところで、中の君付きの女房が主語になっている。一文は「近くに控えている女房

は二人ばかりであったが、スズロナル男が入って来たなら、これは何事かとおそばへ寄ってまいることもあろうが、（薫八）かねてから親しくお付き合い申していらっしゃる間柄のことなので」となり、その後にそれなりの事情があるのだろうと察して、女房たちは遠慮して無関心を装い退いたという文がこの後に続いている。つまり、ここでスズロナル男は「無関心で何の用件もない男」の意で使われていることになり、スズロそのものは、先の「若紫」の例と同じ義にとれる。最後の「浮舟」の例は、中の君の心内語で、スズロナル人は薫を指している。要するに、ここは薫を頼りにして、その親切を有難く思うようになったりなどした私の過失がもとで、夫である匂宮の信頼が劣る身の上となったのだと、中の君が思い続けるところで、スズロナル人は、「特に縁故のあるわけでもない人」の意を表している。よって、ここも先の「若紫」や「宿木」の例と同じく、スズロは「無関係な」の意味にとれる。そして、この「無関心な」「無関係な」の意を表すスズロは、初めてこの『源氏物語』になって出て来たものなので、これを以後、新しくGとして付け加えることにしたい。

次にもう一つの新しい意味は、わずか一例しか出て来ないが、左に記すようなものである。

。何心もなく参りて、かかる事どものあるを人はいかが見ん、すずろにむつかしきわざかなと思ひわぶれど・・・

＜蜻蛉＞

右の文では「何心もなく」から「わざかな」までが、浮舟に付いていた女房、侍従の心内語となっている。浮舟の死後、匂宮は、もともと浮舟にと準備した品々を、浮舟にゆかりのある侍従への引き出物として下賜する。それに対して、侍従は「このような頂戴物があるのを、他の女房たちがどう思うことか、スズロニ面倒なことになった」と困惑する。よって、ここのスズロニは、自分では考えてもいなかった品々を頂いたことから、「思いもよらぬ」の意にとるのが適当だと思われる。となると、このスズロはこれまで考察して来た中の、Bによく似ている。ただ、Bの場合には「思いがけない」だけでなく、その上に不快な感じを伴っていたが、右の例は特にそういう感情とは関係なく、ともかく意外で、びっくりしたという意味で用いられている。そこで、これも今まで見られなかった新しい意味ととり、Hとして追加することにしたい。

以上、『源氏物語』には、これまでのA～Fに加えて、新しく左の二つの意味が出て来たことになる。

G・・・・（心を引かれることもなく、かかわりのないさまを言い）　無関心な、無関係な

H・・・・（予期しなかったことが出現して驚いたさまを言い）　思いがけず、意外に

さて、これまで、中古を代表する三つの作品『伊勢物語』『枕草子』『源氏物語』におけるスズロの意味・用法について考察を加えて来たが、だいぶ紙数を費やしてしまった。これは、スズロの用例数が思ったより多く、意味認定をするにあたって、かなり詳しく説明したためである。それでは、今までA～Hまで八つに分けて見て来たスズロの意味は、はたして他の中古の作品でも使われているのであろうか？　また、中世以降も引き続き出て来るのであろうか？　そして、八つの意味は、どれが基本的なもので、そこからどのように派生して行ったのであろうか？　さらに、音韻交替したソゾロとの関係はどうなっているのであろうか？　これらに関しては、次号以後に調査結果を述べることにし、ひとまず今回はこの辺で、大方のご叱正を期待しつつ、筆を置くことにしたい。（注5）

注1　定家本系統は、さらに天福本、武田本、流布本の三つに分かれるという。諸本の系統については『伊勢物語に就きての研究1』校本篇（池田亀鑑　昭和33・3・30　有精堂）に詳しい。

注2　阿波国文庫（旧蔵）本は、神宮文庫本系統の諸本の一つで、鈴木知太郎博士によって、昭和35年に紹介された。（『武蔵野文学　七』）　江戸初期の書写で、同じ神宮文庫本系統の谷森（善臣旧蔵）本とよく似ていると言われる。（『伊勢物語に就きての研究3』補遺篇・索引篇・図録篇　大津有一　昭和36・12・20　有精堂　三五七ページ参照）

注3　タクブラとタコムラはブとムも交替しているが、これはバ行、マ行が共に両唇音で盛んに交替するため、（例　ケブリ〈煙〉　↕　ケムリ、　スサブ〈荒〉　↕　スサムなど　）対応例として考えて問題はない。

注4　一四段以外のスズロが『伊勢物語』の他の諸本でどう書かれているのか調べてみたところ、まず七八段が伝肖柏筆本でソゾロとなっていた。この本は宮内庁図書寮蔵で、古本系統に属する。（『伊勢物語に就きての研究2』研究篇　池田亀鑑　昭和33・10・30　有精堂　一一〇四ページ　参照　）なお、この例からもスズロとソゾロの揺れていたことがわかる。その他、九段、一四段、一一六段のスズロがいずれも最福寺本ではスゾロとなっていた。この本は神奈川県三崎市の最福寺が所蔵し、伝肖柏筆本と同じく古本系統に属している。書風からすると南北朝以前の筆写と考えられるらしいが、いずれにしろ、スゾロはスズロがソゾロに移行する時の中間の形と推定されるので、後で取り挙げて詳しく述べることにしたい。

注5　今回の調査で底本としたのは、『伊勢物語』と『枕草子』が旧版の岩波古典文学大系、『源氏物語』は旧版の小学館日本古典文学全集である。